

私たちが知るべき世界

～RWANDA～

愛知県立東海商業高等学校

家田綾香 家田芹菜 一之木美幸
大畑成美 小川恵美 鹿島なつみ
加藤咲紀 杉山沙也加 鈴木ゆい子
高須ひかり 高塚絢子 高見千花
田中真琴 西山晴香 譜久山千波

1. はじめに

私たち15人はこの4月から「課題研究」国際コミュニケーション講座で学んでいる。数ある講座から国際コミュニケーション講座を選択した理由は、国際化の中、日本人として国際人として生きていく力を身につけたいと思ったからである。私たちは世界に対して広く興味を持っており、時々熱い議論を交わしながら私たちの国際コミュニケーションとは何かを模索している。

2. 国際コミュニケーションとは何か

(1) 私たちが考える国際コミュニケーション

国際コミュニケーションとは、語学の勉強のみならず、世界の現状を知り交流を深め、協力し助け合うこと、さらにはみんなが笑顔で、平和であり続けることと私たちは考えた。

世界中の人々にはさまざまな背景がある。いろいろな事情を背負った相手に応じて思いやりを持ったコミュニケーションをしたい。そのためには歴史や文化、国際時事を調べることが必要だと思った。世界には不条理な諸問題が多く存在する。貧困、内戦、レイプ、人身売買、HIV/AIDS、植民地遺制、FGM、少年兵、児童労働……。調べてみるうちに、私たちはあまりにも「無知であること」に気がついた。まずは、もっと世界を知ることから始めようと思った。

(2) 国際時事としてのルワンダ

国際時事を調べる中で、あるときルワンダについて知る機会があった。そこには、知らないでは済まされないことがたくさんあった。そこでルワンダについて調べ、知識を深め、現状を知り、さらに多くの人に伝えたいと思った。

3. ルワンダについて

20世紀始め頃までのルワンダは、農耕民族と狩猟民族が平和に共存していた。しかし、ヨーロッパ諸国がアフリカ諸国を植民地支配し始めたころ、同じくルワンダもベルギーに支配された。そして、背が高く鼻が細いつちと、背が低く鼻が広いフツに区別され、ベルギーは少数派ツチに多数派フツを間接統治させた。ベルギーはツチに良い教育と職業を与えた。やがてツチはフツをレベルの低い人々とみなすようになり、フツとツチの間には憎

しみが生まれるようになった。

1994年、フツのハビヤリマナ大統領を乗せた飛行機の墜落事故によってフツによるツチへのジェノサイド（大量虐殺）が始まった。昨日まで仲良くしていた隣人が翌日には凶器を持って殺しに来た。性別や年齢は一切関係なかった。凶器には銃ではなく敢えてナタが使われた。多くのツチは学校や教会に隠れた。しかし、彼らに安全な場所などなかった。このジェノサイドは3ヶ月間続き、約100万人ものツチが亡くなった。その間、国連はルワンダから撤退し、その映像が報道された世界もルワンダに救いの手を差し伸べることはなかった。「隣人が隣人を殺し合う」という信じられない光景により、ルワンダは全国民の8分の1の命が奪われた。単一民族である日本人には理解し難い出来事であった。

その後18年が経過し、現在のルワンダはアフリカ諸国の中でも平和な国と言われている。それはツチとフツがそもそもひとつであったルワンダ人として、互いに過去を許し合う努力をし、ともに、国の復興に力を合わせているからである。私たちに「話し合う」という感情は理解できない。しかし、彼らの笑顔を見たとき、応援をしたと思った。

4. 私たちにできること

ルワンダを調べていく中で、私たちに何ができるだろうかと考えた。

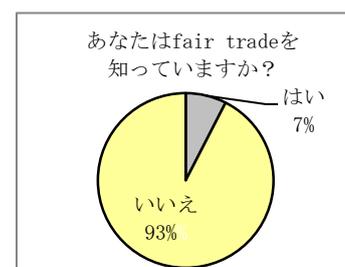
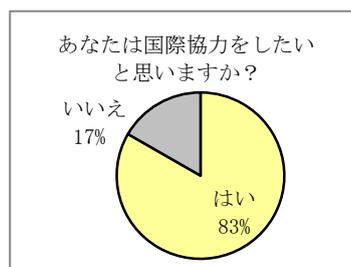
(1) 伝えること

何よりもまず強く意見が一致したことが「伝えること」であった。ルワンダの出来事に目を背ける権利が国際社会にあったのだろうか。もっと「伝える」ことが必要だったのではないのではないのか。私たちは知った者の責務としてこの現実を伝えていきたい。そして、ルワンダだけではない。シリア、スーダン、イラクなど知るべきことはまだまだたくさんあるはずである。「かわいそうだね」で終わるのではなく、私たちはもっと議論をし、伝えていきたい。

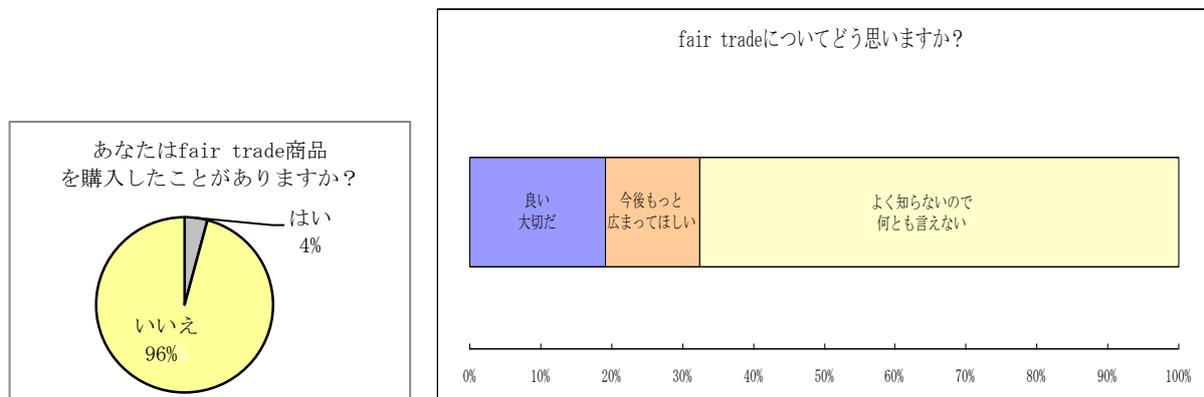
(2) fair trade

そして、fair trade という存在を知った。fair trade とは、不利な立場に追いやられた生産者や労働者に対してより良い持続可能な取引の機会を提供し、とりわけ開発途上国の生産者・労働者の権利や環境を保護することを目指した活動である。学校の授業ではこれまで聞いたことのない言葉だった。しかし、先進工業国の人間として意識すべき購買活動であると感じた。そして、これならば私たちにもできる協力ではないかと思った。私たちは学生であるため、お金もなく、募金もできない。学校の授業があるので、今すぐルワンダに行くこともできない。しかし、fair trade の考え方を多くの人に広めることは今すぐにも始められる。

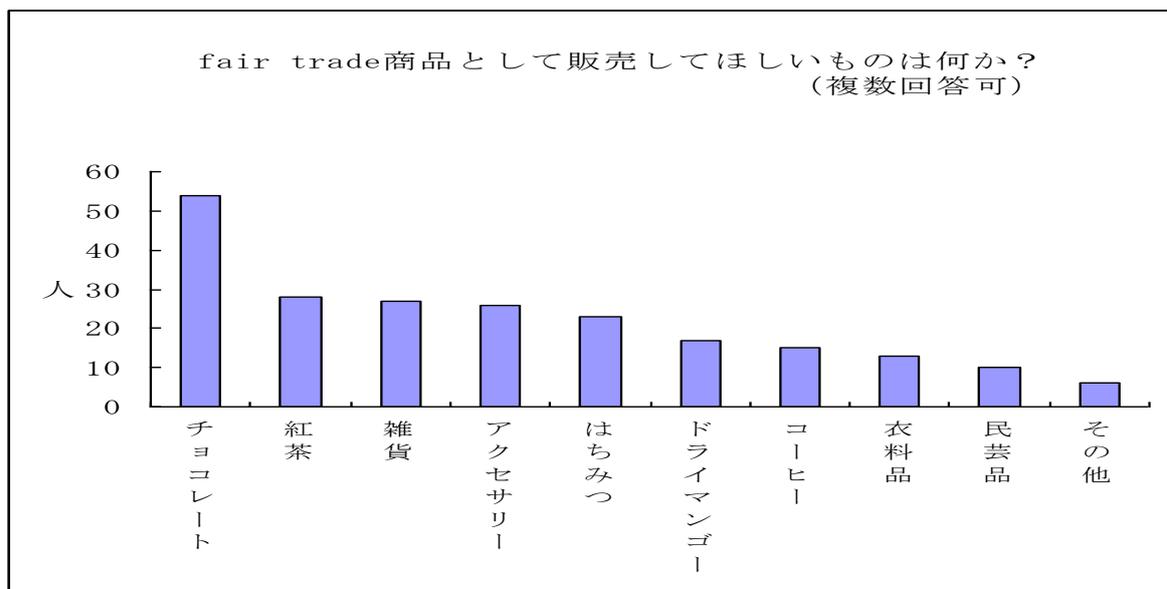
そこで、まずはアンケートを実施した。その結果、国際協力をしたいと思う人は8割以上を占める半面、fair trade について知っている人は1割に満たないと分かった。



また、fair trade に対する意識は以下のようなになった。fair trade について知る機会が少ないこともあり、ほとんど普及していない。まずは fair trade を周知させることが課題である。



次に、日本人はどのような商品に興味があり、必要としているのかを調査した。その結果、日本では生産されない商品に票が集まった。



ある日、私たちは fair trade 商品専門の店舗に取材に行った。正直、fair trade 商品はスーパーで販売されている商品よりも割高に感じる。しかし、安い商品は何故安いのかを考えたときに、そこには児童労働であったり、低賃金であったり、正当な労働対価が支払われておらず価格が抑えられていると考えられる背景がある。「安い」には理由があるということをもっと意識すべきではないだろうか。

アンケートを通して fair trade への理解はまだまだ少ないが、私たちはこの活動を広めていこうと話した。日本人は、自分の身のまわりのことにしか関心がないのではないかと思う。したがって、まず知らせることが大切である。fair trade 商品を買うことにより、生産者への意思表示をおこない、国際協力に貢献できると伝えたい。

(3) ルワンダとの fair trade

ルワンダは土地が肥沃で、農産物は豊富に獲れるが、内陸国のため輸出をすることは難しい。しかし、少なからず日本でも fair trade 商品が販売されている。例えば、寒暖差のある気候を利用した良質なコーヒー豆や牛の角を使ったアクセサリー、サイザル麻を使ったカゴ、また、HIV 陽性者の作ったバッグなどが fair trade 商品として開発されている。



(牛の角やサイザル麻で作られた装飾品)



(ストリートチルドレンが作ったバナナ茎のリーフカード)



(HIV 陽性者の作ったバッグとカゴ)

ルワンダは遠い国のように思うが、そのルワンダからはるばる商品が日本に届くことを考えると感慨深いものがある。買い物を通して遠いルワンダの環境や人権を守ることができるのである。fair trade の理解を通してルワンダをはじめ、世界の出来事は日本と互いに繋がっていることを意識した。私たちは「日本に生まれて良かった」と思うのではなく、実は繋がっているということに気づき、行動していきたい。

5. おわりに

この授業を通して、私たちは世界に対していかに無知であるかを知った。勉強すれば勉強するほど勉強不足を感じた。国際協力をしていくためには、学ばなければいけないことがたくさんあると気づいた。私たちが驚いたことの中に、ルワンダ人の笑顔がある。暗い過去を持ちながらも毎日笑顔で暮らしている彼らを理解することができなかった。私たちがなら恨むであろう人々を許そうとする彼らの心の大きさに心を打たれた。その笑顔を守るために、私たちは一人では小さな力でも、まずは行動を起こすことが大切であると考えた。これからは気づき、想像し、考え、行動していきたい。ルワンダの情勢や fair trade について伝えていくことは、始めは微力でもみんなの力を集めればきっと大きな力になると信じている。私たちが知るべき世界はまだたくさんある。私たちの国際コミュニケーションはまだまだ始まったばかりである。



(元青年海外協力隊の加藤氏によるルワンダの話)



(手のひらは平和と思いやりの象徴と言われている)